

令和元年6月7日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17068

研究課題名（和文）日中関係における誤認知の構造的なメカニズムに関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文）The Structural Mechanism of Misperception in Sino-Japanese Relations

研究代表者

張 雲 (Zhang, Yun)

新潟大学・教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：70447613

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日中米トライラテラル関係の構造により生産されてきた日中の「誤認知」という新しい分析枠組みを構築したうえで、2000年から過去15年間の日中知識エリート層の相手国への認知を分類・追跡し、日中の相手への政策の知的ロジックを究明する。さらに、5つの事例を通じて実証研究を通じ、日中関係における誤認知と相互不信の形成・再生産の構造的なメカニズムを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は今までの日中相互不信に関する研究の歴史重視、二国間の特殊性強調などの視点から一線を画す。本研究は「日中関係研究の理論枠組みの欠如」の克服を念頭に、先駆けて「誤認知」の国際関係の構造（特に日中米関係の構造的な要因）によって形成される理論的な枠組みを構築し、世界でも例の見ない高い相互依存を持ち、関係強化に意欲と努力を見せる日本と中国が逆に相互不信を再生産するという矛盾現象のパズルを国際関係理論の視点から分析した。日中米関係の構造により日中「誤認知」の形成・再生産の構造的なメカニズムの応用性は研究者のみならず、実務家と国民にも有益な視点として社会的・政策的な意義も期待できる。

研究成果の概要（英文）： This research explains the increasingly turbulent Sino-Japanese relations since the 2000s by innovatively investigating the formation mechanism of mutual misperception deeply rooted in China-Japan-U.S. trilateral structural dynamics. The political and security relationship has been increasingly deteriorating against the high interdependency between the world's second and third largest economies. More ironically, both sides have also shown the intent and made efforts to improve bilateral ties. This research systematically conducts a focused comparison of the evolution of the Sino-Japanese mutual perceptions and policies toward one another during the past decade and a half. Empirically, this research closely examines five case studies that provide insights to IR students and scholars and policy makers on how misperception and mistrust have formed, replicated and intensified.

研究分野：国際関係論

キーワード：日中米関係 認知 国際関係論 日中関係 米中関係 中国政治外交 日本政治外交 日米関係

1. 研究開始当初の背景

- (1) 日中関係における相互信頼が著しく欠如することに異論がないだろう。しかし、既存研究は主に日中関係の特殊性を焦点に、それぞれの立場から自国の論理を強調し、結果として、互いに相手の「誤認」を非難し、「認知の悪循環」に陥ったのである。誤認知が如何に生まれてきたのかという重要な知的探求は十分なされていないのである。現実としては日中双方とも信頼醸成に意欲と努力を見せているものの、逆に相互不信が深まっている。これはなぜなのか？既存研究は日中関係の歴史的要因、特殊性、二国間の枠に過剰な焦点を当て、日中の相互認知も普通の国と同じく国際関係の構造に影響されるという共通の側面が軽視されてきた。つまり、日中の誤認知形成の構造的なメカニズムの解明の課題が残されている。この「知的赤字」のアンバランスさを是正することが急務である。
- (2) 本研究の研究代表者は 2009 年から「日米中関係における日中の東アジア地域主義政策の研究」に従事し、アメリカ要因による日中の相互認知と誤認知の形成と外交政策プロセスに大きな影響を与えたことを明らかにした。(Zhang 2013) その後、申請者は「日本とアメリカの知識層の中国台頭への認知」の研究を立ち上げ、「認知」と「政策」との緊密な関連性を重点的に研究してきた。(Zhang 2012) また、実証研究として東日本大震災における日中災害外交の失敗をケースに、不本意の誤認知の再生のメカニズムを解明した。(Zhang 2013) このような背景のもと、申請者は「認知」、「誤認知」の理論的な枠組みを用いて、日中の誤認知形成の構造的なメカニズムを分析することに至った。

2. 研究の目的

- (1) 本研究は日中米トライラテラル関係の構造により生産されてきた日中の「誤認知」という新しい分析枠組みを構築する。そのうえで、2000 年から過去 15 年間の日中知識エリート層の相手国への認知を分類・追跡し、日中の相手への政策の知的ロジックを究明する。さらに、5 つの事例を用いて実証研究し、日中関係における誤認知と相互不信の形成・再生産の構造的なメカニズムを解明する。

(2) 具体的な目的

日中の相互認知は互いの「直接認知」(Direct Perceptions)だけではなく、米国というプライマリ変数を中心に相手を認知している「間接認知」(Indirect Perceptions)(Zhang 2013、2014、張 2015)の側面は極めて重要であることを明らかにする。

「直接認知」の追跡に加え、「間接認知」の部分を中心に日本と中国の知識エリート層をそれぞれ 5 つのグループに分類し、2000 年代からの認知の変遷を追跡する。

上記の認知の 5 分類をそれぞれの相手国への政策と照合し、それぞれの政策の背後の知的ロジックの主な担い手を確定する。

日中米関係のダイナミズムの変化への認知により「溢出効果」(Spillover Effects)が互いの従来の理性的な直接認知を変形させることを解明する。

この「溢出」の積み重ねにより、互いの負の直接認知に全面的に変化していくことになり、意識されずに誤認知が構造的に増強され、相互不信が再生産されるというプロセスを明らかにする。

下記の 5 つの事例を通じて実証研を行う。(1)2005 年の中国の反日キャンペーン;(2)

2000年代の日本の東アジア地域主義政策；(3)2010年の漁船衝突事件とレア・アース禁輸事件；(4)3.11東日本大震災における日中災害外交の失敗；(5)2012年尖閣諸島国有化をめぐる日中の対立。

3．研究の方法

本研究は「日中関係研究の理論枠組みの欠如」の克服を念頭に、先駆けて「誤認知」の国際関係の構造（特に日中米関係の構造的な要因）によって形成される理論的な枠組みを構築し、日中関係における誤認知のメカニズムを国際関係理論と実証研究を融合した視点から分析を行う。

理論研究：本研究は「誤認知」(Misperception)とSystem Effect理論(Jervis, 1976, 2007)をベースに、日中米トライラテラル関係の構造により生産されてきた日中の「誤認知」の分析枠組みを構築し、2000年以降の日中の相互認知の変遷を明らかにする。

実証研究：2000年から過去15年間の中国と日本の知識エリート層の相互認知を分類・レビューし、中国の対日政策と日本の対中政策との関連性を重点的に追跡するという基礎的な研究を行う。具体的には、2000年から彼らの論文、言説、講演、評論、会議録などを整理したうえ、上記の専門家と関係者への直接の聞き取り調査を行う。さらに、5つの事例を通じて実証研究を行う。

具体的にはまず各事例に関して、日本語、中国語、英語での関連する書籍、論文、政策決定者・実務家の回顧録、政府文書、新聞・雑誌記事などの文献収集を行い、事例の主な事実変遷を系統的に整理する。

予備研究ではすでに3つの事例について一定の研究を行い、いくつかの論文を発表した。これをベースに、更に系統的、また第一次資料の探究を中心に実証研究の精度を高める。日中米三カ国で事例に携わった関係者、主要大学とシンクタンク専門家、オピニオン・リーダーなどへの聞き取り調査を実施する。

4．研究成果

(1) 中国=日本=米国の三ヶ国関係のダイナミクスが、誤認知の起源を理解する上で重要な変数となる。

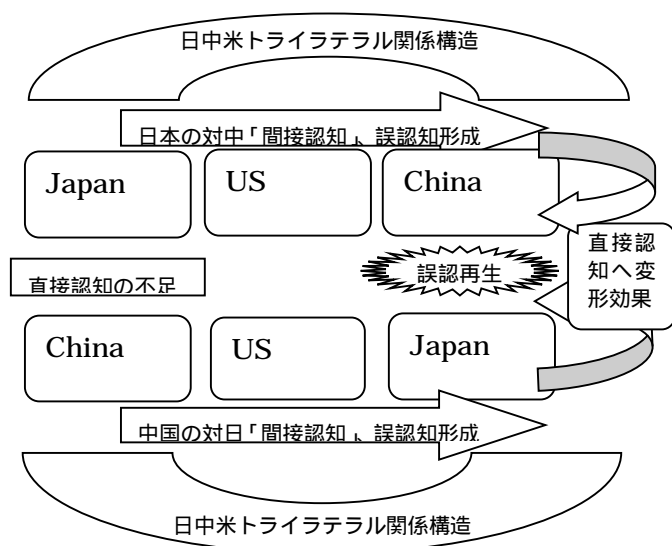
中国と日本の間の相互誤認知は、二国間の文脈における相互認知(直接認知)および中国=日本=米国の三ヶ国関係のダイナミクスに対する個別の認知(間接認知)が合わさったものである。相互認知は後者の影響を大きく受け、相手国に対する両国の政策に関する知的基盤を形成してきた。いかなる二国間関係も完全に独立した二国間関係とはならず、より広範な国際システムの中に存在している。政策決定者の政策論理は、相手側に対する直接認知だけによってのみ決定されることはありえず、国際システムに対する基本認知の枠組み内で決定される。日中関係を取り巻く国際システムの主要な特徴は、中国=日本=米国の三ヶ国間関係である。日中関係は孤立に存在しているのではなく、つねに三ヶ国間のダイナミクスの影響下に置かれているのである。

(2) 相互の間接認知は相手国に対する政策に根拠を与えてきたが、同時に「波及効果」をおよぼし、かつてはより合理的であった直接認知を侵食する傾向にある。中国も日本も外交政策全体における最大の注意を米国に向けており、米中関係および日米関係についての認知が主要政策論理を供給する傾向にある。中国と日本は、重要な

局面において日中関係をアメリカへシグナル伝達のプラットフォームとして利用し、米国に影響力を行使しようとするかもしれない。このような試みは、当初は日中関係の弱体化を意図していなかったとしても、相互の直接認知に否定的な先入観が宿る、という結果に結び付く。その過程において、相互の間接認知は、相互の直接認知に波及効果をおよぼす。こういった否定的な「波及効果」の蓄積により、より否定的な相互の直接認知が形成されることになるのである。

(3) 波及効果が時間をかけて蓄積されると、相互の直接認知は全体として否定的な変化を示すようになる。いったんそれが普及してしまえば、善意の行為すらも不当に無視されるか、あるいは悪意のあるものとして解釈される可能性も容易にある。この不幸なスパイラルにおいて、不信はさらに反復される。結果として、行き渡った誤認知を解くことが必要となるため、日中関係の改善は極めて困難となるのだ。関係改善のための善意と努力にもかかわらず、現在我々が、相互不信が発生して不可解に増加していくのを目撃しているのは、そのためなのである。

前述の分析枠組みに従うと、広く行き渡った誤認知は最初から存在していたわけでも、主に歴史的要因だけから発生したわけでもない。むしろ、国際システムの構造的制約、ならびに誤認知の一般的メカニズムから発生し、それによって膠着しているのである。このような思考の変化によって、中国と日本との不可解な事態を説明するだけでなく、政策立案過程における日中関係への否定的な波及効果をも意識的に考察できるようになる。この過程を明確に整理することで、相互の直接認知における否定的な変化を阻止する予防措置をタイムリーに取るのに役立つであろう。下記の図に参照



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)
〔雑誌論文〕(計8件)

張雲、「中国の国際関係における戦略認知と対日政策との関連性」、『中国研究月報』、第72巻第5号、2018年5月1-15頁。 査読あり

張雲、「日本対台湾戦略認知と政策的学理と歴史考察」、『日本学刊』、2018年第6号、73-94

頁。(査読あり)

Yun Zhang, TPP Setback and the Future of Asia Pacific Economic Order, *China International Strategy Review* 2017, pp.289-306, January 2018. (査読あり)

Yun Zhang, “The New Normal in Sino-Japanese Relations: Assessing Abe’s Domestic Political Resources and Their Implications for Bilateral Ties,” *East Asia Policy*, July-September 2017, pp.30-37. 査読あり

張雲、「地域研究と国際政治学の対話と融合: 一帯一路構想の知的基盤」、『外交評論』、2017年 第5号、第141-156頁。査読あり

Yun Zhang, “Co-constructing East Asian International Order and China-Japan-U.S. Trilateral Relations,” *China International Strategy Review*, No.9, September 2016, pp. 278-289. 査読あり

張雲、「アセアンの国際秩序観と中国・アセアン・米国関係」、『南洋問題研究』、2018年 第1号、第1-7頁。査読あり

張雲、「China Watching から China Studies への試み」(書評)、『中国研究月報』第70巻第7号、19-21頁、2016年7月。(査読あり)

[学会発表](計8件)

「地域研究と国際政治学対話」、地域国別理論与方法会議、2018年4月14日、昆明、雲南大学。

「超越日台関係特殊感情論」、台湾問題研究会議、北京大学、北京、2018年8月7日。
Democracies and the Debate of International Order, Beijing Forum 2017, Peking University, Beijing, November 4, 2017. 審査あり

「アセアンの国際秩序観と中国・アセアン・米国関係」、比較視野の東南アジア国際関係国際会議、厦門大学、2017年10月29日。審査あり
「地域研究と政治学との対話 - アメリカと中国のケースを中心に」、日本国際政治学会年会、神戸、2017年10月27日。審査あり

「中国の国際システムへの戦略認知と対日政策の関連性」、アジア政経学会年会、一橋大学、2017年6月24日。審査あり

China-Japan-US Trilateral Relations and the East Asian International Order, The 30th ACPS Annual Meeting and International Symposium, Zhou Enlai School of Government, Nankai University, Tianjin, China, June 10-11, 2017. 審査あり

Two Democracies and the Debate of International Order: A Chinese Perspective, Workshop: Democracy, Conflict, and New Asian Geopolitics, Co-organized by Hitotsubashi University and the Carnegie Endowment for International Peace, Hitotsubashi University, Tokyo, Japan, May 29-30, 2017. 審査あり

「国際関係における戦略認知と外交政策の関連性—中国の対日外交を中心に」、日本国際政治学会2016年度研究大会、幕張メッセ(東京都) 2016年10月14日。審査あり

[図書](計2件)

Yun Zhang, *Sino-Japanese Relations in a Trilateral Context: The Origins of Misperception* (New York: Palgrave Macmillan, 2017).

『可控的紧张-中日美之间的认知与误认知』(日中米関係における認知と誤認知) 浙江人民出版社、2016年4月。